

とうきょうすくわくプログラム活動報告書

園名	久米川保育園
日時	令和7年6月27日

1. 活動テーマ

<テーマ>

自然・・・2歳児「園庭で虫探しをしよう」

<テーマ設定理由>

・自由遊びの中で、子ども達同士で虫を探したり捕まえて観察することを楽しむ姿が見られた為、設定した。

2. 活動スケジュール

・園庭で虫探しをして楽しむ。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・木を観察したい様子が見られたので、ビールケースを用意し上がって見れるようにした。友達が色々と言葉を言うたびにその言葉に反応し、みんなで虫探しを楽しんでいた。

4. 探究活動の実践

<活動内容>

・子ども達が木を見ながら虫を探す様子が見られたので、数名で木やその周辺に虫がいるか探し始める。



<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関り>

子A：ハナミズキの木にしがみつくようにしてビール箱に乗り、木の上を眺めている。
 指差し「テントウムシいた」と言う。
 B：Aの指さす方を眺めている。
 C：木の葉を見ている。
 A：テントウムシがいたことを知らせ「テントウムシあかちゃん」「テントウムシここ」。
 C：見ようとしてビール箱に乗ろうとする。
 保育者：見つけられず「どこだ?」「ここにいたの?」と答える。
 A,B：幹を眺めている。木の皮が細かくひび割れていて指を這わせている。
 D：「さっき飛ぶやつがいた」左手を振りながら話す。保育者に伝えバケツを取りに行く。
 保育者：「なにかいるかな」
 E：「カマキリとかクワガタがいるよ」ビール箱に乗り幹を探している。
 保育者：「下にもなにかいるのかな」
 D：地面に何かを見つけて眺めている。手を伸ばし触れようとするが取らずに眺めている。
 F：「アリさん」と言いながら地面に両手をついて眺めている。
 A：ビール箱から下り地面のアリをしゃがんで眺める。
 誰かが「なに、なに」「カマキリ」と話すのに応じ、保育者が「カマキリいた?」と応じる。
 E：「カマキリ木にいないんだよ。クワガタとか・・・」
 A：地面にいた虫を指でつまむ。器に入れる。保育者に見せる。
 C：木の葉の部分が気になるのか、眺めている。
 B：同じ場所で木の上の方を眺めている。見つからず、木の皮を剥き始める。
 E：ビール箱に乗ろうとするCを「Cちゃんおいで」と誘い、自分の場所を少しあける。
 「上の方にいるかもよ」木の上を眺める。
 A：「アリさんいないんだよ」「アリさんにげたの」
 E：「上に何かがあったよ」Cと共に上を眺める。
 A,Cフェンスの外に何かを見つける。
 A：「ちょうちょだよ、あれ」
 D：フェンスの外にいるチョウを捕まえようとする。届かないのでシャベルで取ろうとする。
 フェンスの隙間に入らないのでフェンスの上からシャベルを出そうとしている。
 目の前に飛んできたチョウの動きを眺めている。
 E：器に入った雑草を一本つまみ木に向けて「お野菜を一本あげよう」と話す。
 保育者：「木にお野菜あげるの?」と聞く。
 E：「カマキリにお野菜あげるんだよ」
 保育者：「どうやってあげるの?」
 E：「はいどうぞってあげるんだよ」



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・カメラが回っていることによって普段よりも子どもが興味を持って集まってきて、想像よりも人数が増えたためビール箱に乗って観察するには大人数になってしまった。
- ・0歳児でも虫の観察を行ったが、年齢が上がると言葉でのやりとりや反応が違ってきて面白い。
- ・子どもが発する言葉を待っていて自分はあまり話さないよう我慢していたが「〇〇がいたね」「そうしたら図鑑で調べてみようか」等がもっと自然に出てくると良い。
- ・普段の外遊びの中で自然と虫を見て集まってスクワクが始まるのは理想的だった。設定して与えるだけになりがちなので、このように身近に虫がいて勧められたら良いと思う。
- ・幼児クラスが見つかるのを直接教えてもらうのではなく、見て真似ているのは自分で見つけられるようになり遊びの幅を広げることに繋がるので良いのではないか。
- ・他のクラスの子どもの動きを見て自分達も探してみようと思う連続性や繋がりだったりが見られた。
- ・テーマで縛られやすく『虫探し』のコンセプトで進めていくと難しくなってしまう。『自然の中にある虫探し』で考えると虫探しをしながら石を器に入れて音を鳴らしている→石ってこんな音が鳴るんだ等そこで学びがあったかもしれない。フェンスの外に出て「虫探そう」ではなく「何があるかな」と遊びに出てみると草の根っこや花を見つけたりと次の段階に繋げていくと発展性があるのではないか。
- ・虫探しの中から何が学びになっているか保育士が気付いて汲み取らなければならない。発見から発展していく遊びに気付いて興味に寄り添っていくために、すくわく以外でも活かしていかなければならない。